

衣を引掛けて二階へ上ると、湯女が茶を天目に載せて運んで来る。茶を啜りながら、軽い疲れの快さをしみじみと味ふ。

○

公園の丘へ登ると、青田を隔て、まともに見える城山の頂き  
の城と松山の市街とは、い、眺めである。それと丘の下に鳴雪  
翁の「元日や」の句碑とがあるので、毎日浴後の散歩は公園に  
来る。翁の句碑に近く二本の大山蓮華の大樹が、光った広葉の  
間に、香の高い花を咲かせてゐる。花を眺めるのもい、句碑  
の前に佇むのもい、丘に登って城に対するのもい、池には  
睡蓮が咲いてゐて、翡翠が飛んでゐる。

この公園は幾度来ても倦かない。

たゞ、嫌なのは、何時も茶屋の椅子に見受ける、正宗の二合  
瓶の爛を命ずる下司の男女である。

○

退屈だ、退屈だ、さりとて脇息に凭れてものを思ふは月並だ。  
よつて八畳の座敷のまん中に長々と寝そべる。退屈な眼は自ら  
部屋の調度を物色する。逗留する宿の調度を物色しても始まら  
なかつたが、寝そべった身体は他に業もない。

古い宿だけに天井の古びはい、と思ふ。床に掛けた鶴の墨絵  
もい、として、その前へ据ゑた螺鈿の小卓の上の恵比寿と寿老  
人の書は新しいが面白い。それと、書院風の出窓に吊した古鐘  
は宿に來た夜から一番気に入ったものだ。微に揺れる青銅らし  
い古鐘を倦かず眺める。

退屈な眼はやがて眠くなる。何時か眠って何時か覚めた眼は、  
床の壁に現れた大きな蜘蛛に行当る。

蜘蛛は平らな壁を左から右に渡らふとするらしく、一筋の糸  
に身を逆さまに托して、左の後肢で糸を押へながら、残る七本  
の肢を専念に動かして、や、ともすると這り落ちやうとする体  
を必死に壁を渡る。

蹶起して蜘蛛を見つめる。

やうやく壁の半ばに辿りついた蜘蛛には疲労が見える。躁き  
にもがく七本の肢はいよく必死である。カリ／＼と壁にあた  
る肢の音さへ聞える。三十分を費して六尺の壁を渡り幅を横ぎ  
った蜘蛛は、柱の陰にちつとおさまつた。

其処へ茶を運んで來た婢に、柱の陰を示すと

『いやらしい蜘蛛』と一打に打殺してしまつた。

埒もない事だ。

○

茶を啜りながら庭を眺める。宿の裏はすぐに湯神を祀る山で、  
狭いながら山ぞひに庭の泉石の配置は面白い。よく刈込んだ六  
つの躑躅の古株と枝垂桜と藤棚は晩春初夏の候の眺めを思はせ  
る。奥の祠の向ふに紫陽花が見える、石の陰に万両が点々と紅  
の玉を結んでゐる、池の汀には山梔子が白い、苔は地肌の見え  
ぬまでに滑かに蒸してゐる。

ふと、洗面所の屋根に近い崖端に未央柳の黄いろな花を見つ  
ける。この花は生家の古びた竹塀沿ひに、夏になると乱れ咲く  
花だつた。何時も花を折りに茂みへ踏込むと、おはぐる蜻蛉が